

祖父の花

石田正純

母方の祖父の趣味の一つは写真で、かつては、カメラを片手にあちこちでシャッターを切っていた。

また、写真のデジタル化の波は祖父が70歳を過ぎてから訪れた。

しかし、いち早くデジタル一眼レフカメラ、パソコン、プリンターを導入し、デジカメで撮った写真のパソコン上での編集と印刷を嬉々としてこなしていた。

写真好きはご近所／親戚筋でも多少有名だったらしく、

祖父の菩提寺に、天板一枚分に各1枚の祖父が写した花の写真を天井一面分奉納し、

地元の新聞にも取り上げられた。

その祖父も歳を重ねた。

私の従姉妹、つまり祖父の孫が結婚することになり、

その結婚式には当然祖父は出席するものと私は思い込んでいた。

しかし

「出かけていった先々で、迷惑をかけざるを得ない体になってしまったから・・・」

と、出席を自主的に見合わせたことを、結婚式の数日前に知った。

結婚式場の近くのホテルに前泊していた私は、

どれほど見たかったであろう従姉妹の花嫁姿を自ら

見ない

と決めた祖父の心中を、

ベッドの上で思っていた。

「何か、できないだろうか」

数時間悶々とした後、思い立ってホテルを出て電化量販店に赴き、デジタル一眼レフカメラ本体・レンズ等を一通り揃え、戻ってから、始めて触るそのカメラで、撮影の練習に勤しんだ。出来はどうあれ、翌日の従姉妹の結婚式で撮影した写真を、祖父は大変喜んでくれた。

このような親戚の結婚式が数度続き、その度に撮影した写真を祖父に贈ったことをきっかけに、写真を撮り始めた。

撮った写真をパソコン上で眺めながら印刷向けに加工する課程を楽しみながら、

祖父が嬉々としていたのはまさにこれだと、気持ちがあった。

撮影の対象は、いくつかあるのだけれど、最近では「花」の写真を中心に撮っている。

それは、ゴッホの言葉の影響で、描写する対象を

「まずは花の細部を模写し、花一輪、そして風景へと広げていく」というように述べていたことを受けて、

「ではそのように撮影テーマを進めよう」と決めたからである。

もちろん、最初に述べたように、花の写真を菩提寺に提供した祖父の影響も必ずあるに違いない。

しかし撮影するテーマとしての「花」と共に、最近になって益々、祖父に対するある思いを抱くようになった。

「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」
「いづれの花か散らで残るべき。散る故よりて、咲く比あれば、珍しきなり。」

世阿弥の『風姿花伝書』の一節である。

祖父が「孫の花嫁姿を見ない」と決めたことで、私そして祖父の周りの人々は、

「祖父が咲かせた花」
を確かに見たのだ。

〴〵散る故よりて〴〵あの時の花は見る事が出来ない。

でも、自分の心の中では、今でも咲いている。

そして、いつまでも咲いているに違いない。